

内田祥哉先生を偲ぶ

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

明治神宮鎮座百年祭

昨年十月二十八日のことである。見るともなく夕方のニュース番組を見ていた。コロナ禍のために縮小開催となった「明治神宮鎮座百年祭」にあたり、天皇皇后両陛下がご参拝された様子が映し出された。脇に着席された数名の奉迎者の中に、九五歳になる私の恩師、内田祥哉先生のお姿を見つけ、家内共々嬉しくニュース映像に見入った。コロナ禍にあつて、一年近くお目にかかることができなかったのが、いかがおすごしかと思っていたが、背筋をピンとされた式典での先生のお姿を拝見し、とても安堵したのである。

バーは日建連ホームページ上で検索できるので、内田先生の「陸墨」もいつでもアクセス可能である。

そして、日建連会長との関係。山内隆司前会長、宮本洋一会長のお二人は、東京大学工学部建築学科内田祥哉研究室のOBでいらっしゃる。原広司さん（東京大学名誉教授）、三井所清典さん（公社）日本建築士会連合会前会長）、大野勝彦さん（故人・「セキスイハイムMI」の開発者）、近角真一さん（公社）日本建築士会連合会会長）、芦原太郎さん（公社）日本建築家協会前会長）、隈研吾さん（東京大学名誉教授）のように、建築家として活躍する門下生が多くいる一方で、施工管理、そして建設業経営の分野で活躍する門下生が同様に多くいる点に、内田先生らしさが表れている。

恩師の教え

その内田先生らしさとは、建築に関する学術・技術・芸術の総合性を重視し続けてきたことである。年々細分化の進む専門化を否定は

それから半年ほどのことだった。その内田先生の突然の訃報に接することになった。九六歳の誕生日を迎えられたばかりだった。しばらくの間、茫然とした。表現しようのない喪失感を覚えた建築界の人間は多いと思う。内田先生は分野の境を超えた大きな存在だった。謹んで哀悼の意を表したい。



8年前、「内田祥哉先生の米寿を祝う会」の集合写真。内田先生が半世紀以上前に設計された日本電信電話公社中央学園講堂に、先生を師と慕う方々が集まった。最前列に内田先生ご夫妻(2013年10月)

日建連と内田先生

東京大学名誉教授で、建築界ただ一人の日本学士院会員でもいらした内田先生のご経歴紹介の紙幅はない。今回は、日建連との関係を整理して記させて頂こうと思う。まず、伝統と権威のある「BCS賞」だが、佐賀県立九州陶磁文化館

（第二回、一九八一年）、武蔵大学キャンパス再開発（第二四回、一九八三年）、明治神宮神楽殿（第三六回、一九九五年）で受賞されている。また、一九七八年（第一九回）、一九七九年（第二〇回）には選考委員を務められている。そのため、私の知る限りBCS賞の表彰式には毎年出席されていた。実は、この偶数月の本誌連載頁だが、これも初代執筆者は内田先生で、二〇一四年四月号から二〇一五年二月号までの一年間、「陸墨」というタイトルで連載をされていた。その後、深尾精一先生が一年担当され、私は二〇一六年四月号から三代目である。本誌のバックナン

は、特に技術の価値が地域によって違い得ることに触れて、次のように書かれている。少々長くなるが、引用してご紹介しておきたいと思う。

「建築学の特徴の第一に、総合性を挙げるなら、次に挙げなければならぬのが地域性です。それは、気候、地質、のような自然条件ばかりでなく、資源の供給、生産体制、居住形態のような社会条件を含めて、建築が、地域と地域社会の影響を極めて色濃く受けることは、建築の研究とその生産に携わる者が常に強く感じていることで、これが、他の工学とは際立って違う建築学の特筆すべき特徴と考えます」

不肖の弟子である私なども、いささかの経験を積んで、この教えの深さが身に染みるようになった。これは、ある時代、またはある地域で十分な価値を認められなかった建築技術が、別の時代、別の地域で、高い価値を持つことがあり得るといふことを意味する。一度失敗したことがある技術にも希望を見出せる可能性がある。内田先生がそう仰っているように思う。

されなかったが、「建築は、この三つの分野の力をかりて、空間を総合的に組み立てるものである」（一社）日本建築学会『建築雑誌』一九九三年一月号「会長就任の挨拶」より）と強く意識されていた。

学術・技術・芸術の中で、内田先生が特に深く考えられたのは技術についてだと思ふ。内田先生ご自身、日本建築学会大賞受賞後の「所感」（『建築雑誌』一九九六年八月号）の中で、技術について次のよう

に書かれている。「永遠の真理を求めるとは違い、永遠の美を追求する芸術とも違ったものであると考えるようになりまし。技術の価値には、寿命があることを知ったのです。また、技術の価値には、地域によって違いがあることも知りました」

このお考えを簡潔に表現した先生の教えは「技術は質量ではなく重さです」というものだった。先の「会長就任の挨拶」の中で